美帯理館

香鴉

THE BARD OF THE MOUNTAIN

作者 テスス・スポイ 書割 (フノ財重る付章楽斜谿番五策曲響交のくエやーイー〉)

(Suggested by the Slow Movement of the Fifth Symphony of

目をようし、六大天動式さをおりる無

な
い
動
を
い
動
を
い
は
い
い
な
い
い
い
い
い
い
い

滞いななら軒の階座の前い階の出た。

7779#

天国の門以帯〉と、

くやは用しているとびいしょも

「あるなんと」天の王は仰せられた。「われい誓って、

山の詩

ス

モ

リス

数の天の軍権が周の多囲ん汁。

天の王お恵を垂れ、

しいうのは、こちらとうつし世のあい社の領土のことですが、

土地がありますな。 幹の大天動さき、

「あなたい誓って、 も美しいのから

一番でもない

。 八 八 級

「とうしさの計」主却隔れられた。「天動ささも、なりを笑っているの計」

そのとはのでも」山の精人が答えた。「しんし同じ~らい美しい

かれお寄いなお

**休水の前 3 門 4 大き 7 開 り 域 3 水** 

**結人却ユヘユへと登ってめき、鴉いつつ美の喜むを刺はった。「これをまっ** 

ご存版ないとは、主の暮らしのなんとは気の毒なことだろう。

し世の森のようだ。神よいつそうの耐坑鷲を、寝うべきもならし

『ダフォディルの花 刊行記念

ケネス・モリ

ス幻想小説集』

(国書刊行会)

人精の山

Beethoven)

を見ておられるから、

神秘には高い

**冷、木やの下ご無数の陰離草が知き、** 

天上コ森おあるのおろう

)世を旅する途中、世界の美しさに目を留めて、天上にこれを知らせようと思いたっ

し世をお創りになってからずいぶんになる。

数多の銀河

るととはあるだろうか。

すべてを覚えてはいでのおぎかない

9

る山川の音な大天動さきの耳多喜知か、軒よここでよりは聞き到なること却ある弐

新氏のペン・ヤストスの将面ご知う感の手袋を、

夏

ら寄せる数の園の青緑とかすかなきらめきを、 「ある、天土の聖い暮らしを戻の毒なもの式、

姿を現すはず

になった。

いっぽう、

山の詩人は救いを

たら

しにゆくところだっ

詩人は若さの盛りにウェー

ルズとう

うのだ。地獄になんら関心はなかった。

底無しの深みのあいだを占める峰を見つめた。死すべき身の侵略者は、まずそこに

やって来る、

はや

も馬の蹄の音がは

っきりと聞こえる

栖から目を凝らして詩人の訪れを待った。断崖の向こう側、

無限の高みと

上は高い断崖のおもてから下は底知れぬ深みまで、

山の種原以お黄赤木緯淡を狭くれるでか、

0801

してなっていなけ

まな山の空高~轉る雲雀の声を聞

を飛び回る蜜雞の取音を、

のれの

は考えた いろうと

し世の砂海に打

5

主おご有限式ららか。

るし六月の種のカンフゃ

そして天の六あいなる限らせを残えてやろうし

はさしお天土へゆこう、

地獄は倦怠を忘れていられるであろう.

堕ちたる者らと悪鬼どもは、

そうロにした。

なぜなら、

地獄は挑戦に立とうとしており、

詩人は応えるだろう。

かろうじて: 戦いのあいだ、

三度目はかろうじて呼び起こされた喜びの追憶を漂わせて……。

戦いを挑むために角笛が吹き鳴らされた。一度目と二度目はこのうえもなく気怠く、

そんなわけで、遠くから山の詩人がやって来るのを悪鬼の王たちが嗅ぎつけると、

天土기至るいおだれ

天上で

いてというし世の森と強強草から、

**今でして結人幻視り╣で、此様と天国い向なこか。 金中、孝ふ多巡らし、** 

うのだ。

もなにもない。

負けたところで、

永遠に変わらぬ地獄にとってそれがどうしたとい

たらべき密をつくった。その恐むウェー

る地様を重らは出ならぬが、地様を重け的対と窓はされるであるで

「弐な詩ささまえ」妣1の殯腎なふえア言っさ。「山の結人も、

「窓かられような窓かされまいな、なんとしてもやるつもりた」

しかし討とんど長いお留

「見ら、来る今」地獄お顳い式。「証既な攻撃を浴びせる準禰をかはむ」

てこの世の海のきらめきと紫の山々からつくられた。

の声、林のアテッケベリーの球の茎と黄色い葉、

浴するうちにも、地獄の倦怠は確実かつすみやかに忍び入った。

存在することへの終わりのない嫌悪をしばし忘れさせた。

戦いのほかに望み 戦いは、勝敗を問 そしてある者は、愚かにも、地獄を征服した。地上に戻って勝利を自慢し栄光に

同じように倦怠と無為に飽き果てている。

「食苗の音なし
れる
で
込む
一
特
人
ね
で
は
い
な
な
な
は
ま
を
よ
な
。

いおおきからの郷で美かいのおいれった。

, f.

びこる永遠に変化を知らぬ悪鬼どもを制圧せんと、地上から乗り込んできた偉大な

れば……かつてあれほど多くの者がそうしたように。地獄には

ある者は打ち負かされ、いまはもの憂げな悪鬼どもとともに地獄にたむ

が嫌気を催していた。地獄のすべてが無限の沈黙と無為に飽き果てていた。救い 炎は、それ自体にとっても倦怠の悪夢となり、終わりのない虚しい責め苦に炎自体

が

も聳え立ち、深淵は底知れず果てしない。おそるべき絶壁に始原より燃える濃密な

もの憂い炎の断崖から地獄の角笛の音が挑戦を告げた。崖はどこまでもどこまで

たい倦怠のうちに角笛は挑戦の声をあげた。来つつある者が戦ってくれさえすれば

「やれらの鼻腔をくすぐるこの山の風むなん汁」地線の堕される脊心が言った。「か

り谷を逝んれ

結人むでけいなから山を下

と待て

戦ってくれさえす

・トドリスあるいおコイパとからか、トトマニあるいおかいネズ・サウェリ

「ああ、精心コ」地獄お罷いさ。「なんきあの、あいつの口から出てくるものは。さょっ

この揺れる青い花はなんだ。

4のこくややえに下頭のられや

ああな人と、ぐつし世の海のよう2神々しくぎらぬく青があさらい難いているで

木の薬おなん汁。此線の剤を軒降コ深る、

の葉と華の

5441

あるいお地上い高きとマラヤからか。

いか。軒の里なる梁の山がなけばの別に知い方いるでおないか」

>山の結人幻思っさ。「この森の美しいこと、

の多限「おくろおれこ」

Щ

の詩人

 $\widehat{\sim}$ 

ヴェンの交響曲第五番緩徐楽章から連想して)

2

**種原の黄花大舗殺と流れてお落さる山川の音楽やら、黒邪鳥と森動、毗水麒と蒋公** 

**郵匹の種亰
3対)
減の年登、**